

組織の持つ「観」の形成

～言説的視点からの接近～

経営学部 国際経営学科

講師 真木 圭亮

はじめに

組織論は、長く停滞している。1980年代、組織をひとつの情報処理機構として捉える視角がGalbraith(1980)や加護野(1988)によって提示されたが、その後の組織論は組織そのものの特性について論じるものから、組織間関係や組織間ネットワークに主眼が移ったように思われる。もちろん、組織間での協働が一層盛んに行われるようになってきている近年では組織間関係やネットワークの重要性は増す一方であるが、他方で組織というものそのものについて論じることが置き去りにされてはいないか。組織について論じ、それを通じて人々の組織生活への理解を深めていくための新たな一步を、組織論者は踏み出していく必要がある。これが本研究の根底にある問題意識である。

組織の「観」と「言説」

組織論の根本的な問いのひとつとして、「なぜその組織は（その組織の人々は）そのような行動をしたのか（できたのか）」というものがある。ある組織と他の組織との行動の違いを理解し説明することが、組織論のひとつの目的であるが、組織の行動を論じるには、その背後には組織の「ものの見方」、すなわちさま

さまざまな事柄に対する「観」が潜んでいる。戦略にかかわる「観」であれば、それは戦略スキーマ(沼上・浅羽・新宅・網倉, 1992)と呼ばれ、企業組織の目的やありようであれば、それは企業パラダイム(加護野, 1988)と呼ばれるが、いずれにせよ組織の行動の背後には、さまざまな事柄に対するその組織特有のものの方である「観」が潜んでいる。ただ特定の組織の行動について論じて、「なぜその組織はその行動をしたのかできたのか」という問いに答えることはできない。その組織の持つ観の形成に着目して初めて、その組織の行動について理解することができる。組織論を前進させるための糸口は、「観」にあると言える。

しかし、組織固有の「観」へのアプローチは難しい。組織の「観」と特定の行動との確たる因果関係の証明が困難だからである。特定の「観」があるからそれに対応した行動をとるのではなく、その行動をとるからその基礎となる「観」があるように見える、というトートロジーに陥る可能性もある。どのようなアプローチから、組織の「観」に迫ればよいのか。

その糸口となるアプローチのひとつとして、言説(discourse)に着目したい。近年、組織の言説に注目する研究が盛んに行われるようになっており、2004年にはDavid Grantらの監修による言説にかんする研究論文集である”The SAGE Handbook of Organizational Discourse”が出版されている。言説はあくまで組織研究の視点のひとつであり、その視点をういた研究は多岐にわたるが、言説という視点は組織の持つ「観」を明らかにすることに役立つ。なぜなら、私たちは私たちから独立して存在する事象を言語を用いて表現するのではなく、私たちが言葉を用いることで初めて、私たちを取り巻く世界は形成されていくからである。組織が言葉を用いてその状況を確定することで、組織が対応すべき環境が形成される。ならば、言説的、あるいは社会言語学的な視点から組織を見ていくことで、すなわち組織が特定の状況をどのように表現するのか、どのように定義し切り取るのかに着目することで、組織のものの方、すなわち「観」がい

かなるものか、そして「観」がどのように形成されていくのかについて明らかにできる。言説を用いた研究を展開していくことで、組織論は停滞を打破できると考えられる。

今後の課題

言説に着目した研究を進めていく上での課題は山積している。もっとも大きな課題は、どのように因果関係を明らかにすべきか、というものである。組織における言説のあり方、「観」の形成、そして形成された「観」に基づく行動は、時間的順序が明確でなければならない。しかし、これらの間の因果関係の説明は極めて困難である。この因果関係を明らかにするための適切なデータの収集や分析、調査手法の開発を進めていくこと、これが今後の研究を進めていく上で重要となろう。

参考文献

Galbraith, J. R. (1973) *Designing Complex Organizations*, Addison Wesley.

Grant, D., C. Hardy, C. Oswick, and L. L. Putnam ed.(2004) *The SAGE Handbook of Organizational Discourse*,

Sage Publications Ltd.

加護野忠男(1988) 『組織認識論 企業における創造と革新の研究』 千倉書房.